

日本語教育研修会（2012.1～2012.12）講演要旨

日本語学習用のオンラインツール

—読解支援システムの評価—*

スルダノヴィッチ・イレナ

（リュブリャーナ大学文学部日本研究講座助教授）

本講義では、日本語学習用の様々なオンラインツールを簡単に紹介した上で、学習者のための有用性の観点からそのツールを比較・評価する。特に日本語読解支援システム「リーディングチュウ太」および日本語の文章を解析できる電子辞書サーバー「WWWJDIC」に焦点を当てる。各ツールをリュブリャーナ大学文学部の日本研究講座の4年生の授業において紹介し、読解タスクのために利用させ、ツールの評価を行った。ツールの内容の妥当性に関する量的な評価において、ツールを利用して新聞記事の一部を分析した結果、「WWWJDIC」のほうが「リーディングチュウ太」より取り出されたデータが充実していることが明らかになった。一学年のコースが終わった時にツールの利用法および学習者の好みについて調査を行い、内容の妥当性に関する学習者の意見を調べたところ以上の量的な分析結果と合致しており、内容に関する「WWWJDIC」のメリットが確認できた。一方で、「リーディングチュウ太」のほうが使い易さとユーザインターフェースの面では高く評価されており、学習者に好まれている。その上、授業で紹介していないツールとして「Rikaichan」、「Perapera-kun」のようなポップアップ辞書は使い易いので好んで使われていることが分かった。以上の評価の結果から、ユーザインターフェースおよび使い易さが、取り出せる内容の充実より、学習用の支援システムの選択に当たって重要な役割を持つと考えられる。

* 詳細はSRDANOVIC, Irena (2011) Evaluating e-resources for Japanese language learning. *Electronic lexicography in the 21st century: new applications for new users. Proceeding of eLex 2011*, str. 260-267. http://www.trojina.si/elex2011/elex2011_proceedings.pdfを参照されたい。

筑波大学留学生センター補講コース初級のプログラム評価をめざして

堀恵子（筑波大学留学生センター非常勤講師）

筑波大学留学生センター補講初級コースは、J100からJ400までの4コースからなる。各コースともティームティーチングを行っているため、初級コースを総括的に捉え、担当者間で共有することが必要である。プログラム評価に関する札野（2011）の分類に基づき、本調査と本発表は、内部者が調査し内部者に報告する「自己点検作業としてのプログラム評価」と位置づけられる。そこで、調査と発表の目的を、①評価結果を反映させ、プログラムの質を向上させること、②担当者がよりよく職務を理解し、任務を遂行できること、という2つの目標のために、学習者、教師、教育-学習活動に対して形成的評価を行い、担当者間で情報を共有することとした。

調査項目は、2011年度3学期の各コースのスケジュール、各課の授業と評価の流れ、学習者の出席状況と成績であり、加えて担当者へのインタビューを行った。調査から、各コースの授業は『SFJ』に沿っているが、コースごとに副教材に工夫がなされていること、パフォーマンステストによる評価が多いこと、コースを完了した学習者のほとんどが合格しているが、中退者がコースによっては半数近くいること、インタビューから、担当した作業（テスト、教材などの作成等）に関する工夫と、コースの問題点と改善への提言などが得られた。

今後は、コースの中退者にも目を向けるとともに、幅広い観点からの評価が必要であると考えられる。

日本語学習者のためのリーダビリティの推定

クリスティーナ・フメリヤク・寒川

（リュブリャーナ大学文学部日本研究講座講師）

日本語の多読用教材は近年増えつつあるが、まだ少ないので、インターネット等から容易に電子媒体で入手できる文章を自動的に選別し、学習者の興味と語学力に合う読み教材を収集するためのツールが望ましい。近年、日本語母語話者用の読解難易度推定ツールが開発されており、柴崎ら（2010）の公式（<http://readability.nagaokaut.ac.jp/>）と、佐藤ら（2011）のテキスト難易度推定システム（<http://kotoba.nuee.nagoya-u.ac.jp/sc/obi2/>）はインターネット上利用できる。これらのツールが日本語教育にも応用できるかどうかを確認するために、5つの教科書シリーズの文章をツールにかけ、ツールが推定する難易度の順位と、教科書シリーズ内の難易順位が一致するかどうかを検証した。その結果、一致しない

ところもあり、特に、語彙・文型・構文を極端に制限しながら漢字は制限せず、標準表記に総ルビを付けた『よむよむ文庫』の難易度推定は、シリーズの難易順位と大きく異なっていた。また、同じ文章を学年別漢字配当表に従って6種類の表記によって書き換え、ツールで測定した結果、ツールが表記に大きく左右されることが分かった。

また、日本語学習者にとって読みやすい文章の特徴をさぐるために、日本語学習者用に書き換えられた中級教科書の読解教材とその原文（母語話者用に執筆された文章）を比較し、読みやすくするためのストラテジー、書き換えられた要素を分析した。単純化及び削除、明示化及び具体化、標準化に分類できる書き換えストラテジーが見られ、表記、語彙、構文、モダリティー、談話、文体、さまざまな分析レベルでの書き換えがみられ、読みやすさに影響を与える要素の多様性が確認された。

最後に、日本語学習者用リーダビリティ公式を開発する第1段階として、構築した教科書コーパス内に、統語的な複雑さの指標と考えた1文当たり平均文字数と、語彙的な複雑さの指標と考えた文字TTRを測り、その有効性を確認した。今後、他の測定可能な要素も検証し、テキストをランキングするための総合難易度推定ツールを開発すると同時に、難易箇所を指摘できるテキスト編集用のツールも開発していきたい。

拠点教材のプロトタイプ作成について

李在鎬、今井新悟、信岡麻理、甲斐晶子、
古川雅子、堀聖司、朴眞煥、吉田麻子、岩元隆一
(筑波大学留学生センター)

本研修会では、筑波大学留学生センター「日本語・日本事情遠隔教育拠点」事業で作成中の日本語eラーニング教材の概要紹介を行った上、オーディエンスには実際にeラーニング教材を操作しながら、体験してもらった。研修会の後半では、操作感に関するユーザーの評価アンケートも実施し、学習時間や分かりやすさ、各セクションの内容的妥当性、発話の自然さ、提示方法の適切性などに関するコメントをもらった。今後、評価アンケートのコメントをどのように活かすか検討するとともに、プロトタイプに基づいて、コンテンツの量産化に向け、作業を進めていく予定である。平成24年度中に、初級前半のeラーニング教材を開発、平成25年からモニター公開を行う予定である。そして、本事業の最終年に当たる平成26年には、初級後半まで約200レッスンの教材コンテンツを提供する計画であり、日本語教育機関に広く公開し、日本語教育の新たな姿を示したい。